

土左日記の指示表現をめぐる諸問題

半はん 沢ざい 幹かん 一いち

〔前提1の1〕

日本語の指示語は、佐久間鼎（一九三六）の命名による「コソアド」という体系があることで知られる。体系があるとは、コソアドのそれぞれを語頭音とする語群に全体として形態と機能における共通性と弁別性が認められるということである。それは現代語のみならず、基本的には古代語から引き継がれている。

コソアドにおける弁別性の根拠は、話し手と指示対象との距離関係にあり、近・中・遠・不定という違いがあるとされてきた。しかし近年では、コソアに関して、コとアは話し手からの距離の近遠の差、コとソは話し手側か聞き手側かという領域の違いという、二つの基準が複合されたものとみなす立場が主流となったようである（金水敏・田窪行則編（一九九二）参照）。

コソアドという指示語の用法としては、現場指示、文脈指示、観念指示の三種に分類されるのが一般的である（観念指示を認めない立場もある）。現場指示とは談話場面において知覚可能な対象を指示すること、文脈指示とは談話あるいは文章の言語的文脈上の特定部分を対象として指示すること、観念指示とは現場にも文脈にも認められない、話し手（書き手）と聞き手（読み手）双方の観念内に共通にあると想定される対象を指示することである。

〔前提1の2〕

コソアドの語頭音それぞれは、古代語においては、現代語のコにはコ（あるいはカ）、ソにはソ（あるいはシ、サ）、アにはカ（あるいはア、あるいはハ）、ドにはイツが対応する。三種の用法が見られることも、古代語と現代語とで変わりない。それを不定称を除き、古代語の各指示語群を「系」と称して整理すると、次の【表1】のようになる。

【表1】

用法	現場指示	文脈指示	観念指示
コ系	○話し手側	○前・後／特立的	×
ソ系	○聞き手側	○前／中立的	△
カ系	○両側以外	×	○

「○」はその用法があること、「×」はないこと、「△」は疑問があることを示す（この点については後述）。現場指示における領域の違いは先に説明したとおりである。文脈指示の「前」と「後」は該当指示語に対する指示対象範囲の文脈上の位置を示す。また、「特立的」と「中立的」は指示対象の話題化に関する効果の違いを示す。

この表からは、次の三点が指摘できる。第一に、現場指示用法は、コソカのどの系にも認められ、現場における指示領域において対立することである。どの系にも認められることから、現場指示の用法がコソアドの中核的用法であると考えられる。第二に、文脈指示と観念指示は、コソとカとで一応、相補的な関係にあるということである。第三に、文脈指示用法におけるコとソは、その範囲と効果において対立するということである。

件の土佐日記は、古代語で書かれた文章であり、このことから指示語の使用に関して予想できることは、次の三点である。第一に、文脈指示の用法が中心であること、第二に、現場指示の用法はおもに会話文において見られること、第三に、観念指示の用法はそもそ

も少ないこと、である。

土佐日記の指示語に関しては、漢文訓読的あるいは変体漢文的な特徴を表わす要素の一つとして、その使用量や用法が指摘されている(築島裕(一九六三)や、峰岸明(一九八六)など参照)。しかし、土佐日記の指示語全体の具体的な様相の特徴に関するものは見当たらない。のみならず、土佐日記の注釈書類においては、指示語の意味・用法の捉え方に多くの異同と混乱が見られる。

〔前提1の3〕

土佐日記におけるコソカ各系の指示語数は、次頁の「表2」のとおりである。

横欄の「複合系」は、コソカのうちの二種が複合して出来た語であり、これらは指示性を失い、特定の語義を表わすようになったものである。縦欄の品詞のうちの「接続詞」も、接続助詞と結合して、個別具体の指示性を持たず、一般的な接続関係を表わすようになったものであり、「その他」は品詞としては名詞であるが、「複合系」と同じく、指示語以外の語と複合して、指示性を失い、特定の語義を表わす。

以上を除き、指示語として機能しているとみなされるのは、「小計」という欄で囲まれた太枠の範囲内ということになる。その中の※印の「シガ」については、指示語ではなく、異なる分節によって別語とみなす解釈もある。

以上をふまえて、土佐日記の指示語全体に関する特徴を挙げるならば、次の三点であろう。

第一に、コソカにおいて、圧倒的にコ系の指示語が多いということである。コ系は名詞のほとんどを占め、副詞はコ系しか用いられていない。第二に、品詞で見れば、連体詞が過半を占めるということである。その中でも、「コノ」が約七割にも及ぶ。第三に、カ系の語は、予想どおり用例数も種類数もきわめて少ないということである。

【表2】

	コ系	ソ系	カ系	小計	複合系
名詞	27	3	1	31 [22.5]	コレカレ：6 カレコレ：1
	コレ：21 (含コレら：1)	ソレ：3	0		
	ココ：6	0	カシコ：1		ココカシコ：1
連体詞	64	14	4	82 [59.4]	0
	コノ：57	ソノ：12	カノ：4		
	0	ソガ：1	0		
		シガ：1※			
カカル：7	0	0			
副詞	25	0	0	25 [18.1]	トカク：5
	カク：18				
	カウ（やう）：7				トまれカウまれ：1
小計	116 (84.1)	17 (12.3)	5 (3.6)	138	0
接続詞	11	9	0	20	0
	カクて：7	サて：5			
	カカレど（も）：3	サレども：1			
		シカレども：1			
		サルは：1			
カカれば：1	サれば：1				
その他	1	1	0	2	
	コノごろ：1	ソノかみ：1			

〔問題1の1〕

土佐日記においては、コ系の指示語の使用が目立つが、他のほぼ同時期の作品に比べても、特徴的と言えるだろうか。

比較の都合上、事物を指示する「レ」、場所を指示する「レコ」、様子を指示する「レノ」という、中心的な形態の語に限って取り上げると、次頁の【表3】のような結果となった。

なお、資料には、宮島達夫他編（二〇一四）のほか、古事記は新編日本古典文学全集本（山口佳紀訓読、割注・歌謡は除く）、祝詞は日本古典文学大系本を使用した。また、表のスペースの都合上、作品名を略したものもある。

語形を三つだけにした、この結果を見ても、土佐日記のコ系の多さは突出している。古事記以外の作品はいわゆる和文の文章であるが、竹取物語と蜻蛉日記がやや多いものの、他は四〇〜五〇％台に収まっている。「和化漢文体」と称される古事記は、訓読自体の問題もあるとはいえ、コ系よりもソ系のほうが多い点^が他の和文作品とは異なり、中でも「ソノ」という連体詞形の多さが群を抜いている。

土佐日記のコ系の中でも「コノ」という連体詞形が多いが、これは他作品でも同様であって、それがコ系突出の原因とはみなしがない。むしろ古事記とは正反対に、また他の和文作品に比べても相対的に、ソ系の指示語が少ないことの影響のほうが大きいと考えられる。

以上から、土佐日記の指示語に関しては、コ系の指示語の多さが特徴として指摘できよう。問題は、なぜそうなのかである。

[表3]

指示語	コ系			ソ系			カ系		
	コレ	ココ	コノ	ソレ	ソコ	ソノ	カレ	カシコ	カノ
土佐	21	6	57	3	0	12	0	1	4
	84 (80.8)			15 (14.4)			5 (4.8)		
古事記	74	196	268	11	45	708	0	0	1
	538 (41.3)			763 (58.6)			1 (0.1)		
祝詞	2	4	15	15	0	2	0	0	
	21 (55.3)			17 (44.7)			0		
蜻蛉	88	71	111	45	15	59	10	19	24
	270 (61.1)			119 (26.9)			53 (12.0)		
紫式部	13	4	28	18	1	34	3	0	11
	45 (40.2)			53 (47.3)			14 (12.5)		
更級	24	6	67	8	16	52	0	1	2
	97 (55.1)			76 (43.2)			3 (1.7)		
竹取	35	6	74	17	0	23	1	0	20
	115 (65.3)			40 (22.7)			21 (11.9)		
伊勢	20	5	65	15	9	47	2	1	24
	90 (47.9)			71 (37.8)			27 (14.4)		
枕草子	128	22	108	93	18	110	19	0	21
	258 (49.7)			221 (42.6)			40 (7.7)		

〔問題1の2〕

土佐日記におけるコ系の指示語の多さは、その用法に起因するのではないか。それを各語の用法別の使用数で確認したところ、次の「表4」のようになった。

【表4】

コ系	コレ	ココ	コノ	カカル	カク	カウ	計
文脈	18	0	35	6	17	6	82 [70.7]
現場	3	3	13	1	1	1	22 [19.0]
保留	0	3※	9※	0	0	0	12 [10.3]

この表において、コ系には観念指示の用法がそもそもないので、除外してある。「保留」というのは、※印を付した「ココ」と「コノ」に関して、「ココに」「コノあひだ」という形で、指示語ではなく、漢文訓読的または変体漢文的な、接続詞の用法として、諸注釈書が説明しているので、便宜的に設けたものである。

この表によれば、文脈指示の用法が七割以上を占める。土佐日記は文章であり、言語的文脈に依存しているので、予想どおりの結果である。

ソ系の「ソレ」と「ソノ」の計一五例のほとんども文脈指示であるが、同じ用法として比べれば、中立的なソ系に対して、話題に関して特立的なコ系による文脈指示のほうが圧倒的に多いというのは、文脈展開上は、かなり特殊である。なぜなら、特立が多くなれば、特立としての意味が薄れてしまうからである。ソ系の指示語がベースになるからこそ、コ系の指示語が話題として目立つのである。

また、コ系による現場指示の用法が約二割あるのも、文章としては異色である。談話とは異なり、文章の場合、書き手と読み手とは現場性を共有しないのが普通だからであり、予想したように会話文における当事者同士ならともかく（全二三例のうち、一〇例が会話文での使用）、地の文においてはレベルを異とする用法となる。

[問題1の3]

コ系の用法は、日ごとの記述における用例数と関わりがあるか。

一月二日から二月一六日までの五五日間の、その日ごとの指示語の使用数を示したのが、次頁の「表5」である。「行数」は新日本古典文学大系本による。「頻度」は行数を使用数で割ったもので、数値が小さいほど使用頻度が高いことを示す。

全体的には、一日ごとの指示語の使用数はその記述分量(行数)にはほぼ対応して変化していると言えるが、一点台の、使用頻度がとくに高い日は、一月二三日、一月九日、一月一〇日、一月二〇日、二月一日の計五日、五点以上の、使用頻度がとくに低い日は、一月二六日、一月一三日、一月一六日、二月四日、二月一六日の計五日であり、残りの四五日がその中間ということになる。総行数が四三三行、総指示語数が一三八例であるから、平均使用頻度は三・一行に一例、となる。

一日あたりの行数で便宜的に四つに区分すると、次のようになる。

行数	日数	日数割合%	指示語数(コ系)	一日平均(コ系)
I 一〜九	三九	七〇・九	二九(二三)	〇・七(〇・六)
II 一〇〜一九	一〇	一八・二	五〇(四〇)	五・〇(四・〇)
III 二〇〜二九	四	七・三	四五(三九)	一一・三(九・八)
IV 三〇〜三二	二	三・六	一四(一四)	七・〇(七・〇)

Iの一〇行未満つまり記述分量が少ない日は全体の約七割あり、分量が少ない分だけ指示語の使用数も少なく、全日平均の二・六を大きく下回っている。一、二行程度ならば、そもそも文脈指示の語を用いるまでもないということであろう。実際に、指示語がまったく見られない日は一八日あり、そのうち一行のみがその半分の九日、二行が六日、残りが三行、五行、七行の各一日で、いずれもIのグループである。それに対して、残りの三割にあたるII〜IVの全体の平均使用数は六・八(五・八)で、とくにIIIはその倍近くになっている。

単純に考えれば、一日の記述分量が増えるほど、指示語の使用も多くなる傾向にあるが、使用頻度のとくに高い日と低い日を見てみると、高い方の五日間のうち一月九日と一月二〇日以外の三日、低い方の五日間のうち二月四日と二月一六日以外の三日がIのグループに含まれるのであって、使用率については記述分量と直接の関係はないと言えよう。

そして、このことはコ系の指示語に限っても、全体の八割以上を占めるが、ほぼそのままあてはまる。つまり、コ系だからといって、日によってその使用に偏りがあるわけではなく、コ系の指示語の異常な多さを説明することにはならないということである。

〔表5〕

月日	コ	ソ	カ	計	行	頻度	月日	コ	ソ	カ	計	行	頻度
1221	0	2	0	2	6	3.0	0120	6	1	3	10	17	1.7
1222	0	0	0	0	3	—	0121	5	2	0	7	15	2.1
1223	3	0	0	3	3	1.0	0122	1	1	0	2	8	4.0
1224	0	1	0	1	2	2.0	0123	1	0	0	1	2	2.0
1225	0	0	0	0	2	—	0124	0	0	0	0	1	—
1226	1	0	0	1	9	9.0	0125	0	0	0	0	2	—
1227	7	0	1	8	21	2.6	0126	4	1	0	5	12	2.4
1228	1	0	0	1	3	3.0	0127	0	0	0	0	7	—
1229	2	0	0	2	8	4.0	0128	0	0	0	0	1	—
0101	2	0	0	2	6	3.0	0129	3	1	0	4	13	3.3
0102	0	0	0	0	2	—	0130	1	0	0	1	4	4.0
0103	0	0	0	0	2	—	0201	3	0	0	3	14	4.7
0104	1	0	0	1	4	4.0	0202	0	0	0	0	1	—
0105	0	0	0	0	2	—	0203	1	0	0	1	4	4.0
0106	0	0	0	0	1	—	0204	2	0	0	2	11	5.5
0107	11	2	0	13	26	2.0	0205	8	0	0	8	31	3.9
0108	2	0	0	2	7	3.5	0206	2	0	1	3	7	2.3
0109	13	2	0	15	26	1.7	0207	4	1	0	5	11	2.2
0110	1	0	0	1	1	1.0	0208	1	0	0	1	4	4.0
0111	5	0	0	5	14	2.8	0209	8	1	0	9	21	2.3
0112	0	0	0	0	2	—	0210	0	0	0	0	1	—
0113	0	1	0	1	7	7.0	0211	4	0	0	4	7	1.8
0114	0	0	0	0	5	—	0212	0	0	0	0	1	—
0115	1	0	0	1	4	4.0	0213	0	0	0	0	1	—
0116	1	0	0	1	5	5.0	0214	0	0	0	0	1	—
0117	4	0	0	4	11	2.8	0215	2	0	0	2	4	2.0
0118	4	1	0	5	14	2.8	0216	6	0	0	6	32	5.3
0119	0	0	0	0	1	—							

〔問題1の4〕

それでは、指示語の使用頻度がとくに高い日において、コ系の指示語はどのように使われているか。

以下に具体例を示す。なお、指示語は太字で示し、確実に文脈指示と認められる用法の語は枠で囲み、その指示箇所を波線で示す。丸数字は指示語の通し番号。傍線は指示語出自の語であることを、参考までに示す。引用における漢字表記、句読点、改行などは、新日本古典文学大系本によるが、振り仮名は略す。

〔例1〕二月三日（頻度一・〇）

廿三日。八木のやすのりといふ人あり。①この人、国に必ずしも言ひ使ふ者にもあらざなり。②これぞ、た、はしきやうにて、馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、国人の心の常として、「今は」とて見へざなるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。③これは、物によりて褒むるにしもあらず。

コ系指示語が三回連続で使用されている。①と②の二例はともに前方文脈における「八木のやすのりという人」を指示し、ソ系でないのは、その人物を繰り返し話し話題として取り立てるためである。③の「これ」は前の三文すべてを文脈指示しているとれなくもないが、「こういうことをわざと書くのは」という意であり、書き手自身のその時点での書記行為に対する指示として、現場指示の用法とみなすのが適当と考える。

〔例2〕一月十日（頻度一・〇）

今日は、①この奈半の泊に泊りぬ。

一行一文しかない記述の中に、一例の「この」が見られる。原則として、一日の記述はそれぞれで完結しているので、前日の一月九日の記述内に奈半の泊に到着した旨が記されているが、この「この」はその文脈を指示するのではなく、書き手が今いる場を示す現場指示の用法と見られる。

〔例3〕 一月九日（類度一・七）

九日のつとめて、大湊より、奈半の泊を追はむ、とて、漕ぎ出でけり。

これかれ互に、「国の境のうちちは」とて、見送りに来る人あまたが中に、藤原のときざね、橘のすゑひら、長谷部のゆきまさらなむ、御館より出で給ひし日より、こ、かしこに追ひ来る。①この人くぞ志ある人なりける。②この人くの深き志は、③この海にも劣らざる。④これより今は漕ぎ離れて行く。⑤これを見送らむ、とてぞ、⑥この人どもは追ひ来ける。

かくて、漕ぎ行くまにく、海のほとりにとまれる人も遠くなりぬ。船の人も見へずなりぬ。岸にも言ふことあるべし。船にも思ふことあれど、かひなし。か、れど、⑦この歌をひとり言にしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れども文しなれば知らずやあるらむ

かくて、宇多の松原を行き過ぐ。⑧その松の数いくそばく、幾千年経たりと知らず。根ごとに波うち寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかよふ。おもしろし、と見るに堪へずして、船人の詠める歌、

見渡せば松の末ごとに住む鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる

とや。⑨この歌は、所を見るに、えまさらず。

⑩かくあるを見つ、漕ぎゆくまにく、山も海もみな暮れ、夜更けて、西東も見へずして、天気のこと、楫取の心に任せつ。男も慣らはぬは、いとも心細し。まして、女は船底に頭を突き当てて、音のみぞ泣く。⑪かく思へば、船子、楫取は船唄歌ひて、何とも思へらず。

⑫その歌ふ唄は、

春の野にてぞ音をば泣く、若薄に手切る切る摘んだる菜を、親やまぼるらむ、姑や食ふらむ。帰らや。

上左日記の指示表現をめぐる諸問題

昨夜のうなるもがな、銭乞はむ、虚言をして、おぎのりわざをして、銭も持て来ず、おのれだに來す。

⑬「これ」ならず多かれども、書かず。⑭「これ」らを人の笑ふを聞き、海は荒るれども、心は少し風ぎぬ。

⑮「かく」行き暮らして、泊に到りて、翁一人、専女一人、あるが中に心地悪しきして、物もものし給ばで、ひそまりぬ。

記述分量も多いが、コ系を中心とした指示語が頻繁に出てくる。接続詞や名詞に派生した語も含めれば、さらにその感が強い。

このうち、③「この海」はそこにある海を指示する現場指示、④「これ」は同日の前方にもある「大湊」を指すが、文脈的には隔たっている、書き手のいる、その場を指す現場指示とみなす。これら以外は文脈指示であるが、⑦「この歌」だけが次に出てくる歌を指す後方指示で、その他は前方指示である。

前方指示のうち、⑧と⑫の二例のみがソ系指示語になっていて、ともに直前の文にある「宇多の松原」「船子、楫取」を指す。どちらもコ系ではなくソ系になっているのは、とくに書き手側には引き寄せず中立的な叙述にするためであり、その点では妥当な選択と見られる。

問題になりそうなのはコ系の前方指示の語である。まず、①②⑥の「この」は同じ人々つまり「藤原のときぎね、橘のすゑひら、長谷部のゆきまさら」を指し、一二月三日の条と同じく、その人々を話題化しようとしたのであろうが、さすがにこの反復はくどい。しかも、この五文に六回もコ系指示語が用法を変えて出てくるので、混乱する恐れもある。また、⑬と⑭の「これ(ら)」はともに直前の船唄を指すが、その前に⑫「その」というソ系が用いられていることもあり、話題化のためとはいえ、唐突感は否めない。

なお、⑩⑪⑮の「かく」はそれぞれ前の文脈を中心としつつも、それ以外の含みをもって指示するため、指示の文脈的限定性は相対的に薄い。ただ、指示性自体は認められるので、接続詞化しているとは言えない。

【例4】一月二〇日(頻度一・七)

廿日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。①「かう」ようなるを見てや、昔、阿倍の仲麻呂といひける

人は、唐土に渡りて、帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、②かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、③かしこの漢詩作り

などしける。飽かずやありけむ、廿日の夜の月出づるまでぞありける。④「その」月は海よりぞ出でける。⑤「これ」を見て、仲麻呂の主、「わが国に⑥「かゝる」歌をなむ、神代より神も詠ん給ひ、今は上中下の人も、⑦かうやうに別れを惜しみ、喜びもあり、悲しみもある時には詠む」
とて、詠めりける歌、

青海原振り放け見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞ詠めりける。⑧かの国人、聞き知るまじく思ほへたれども、言の心を、男文字に様を書き出だして、⑨こゝの言葉伝へたる人に言ひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ賞でける。唐土と⑩この国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて、今、当時（そのかみ）を思ひやりて、ある人の詠める歌、
都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

土佐日記に見られる五例のカ系の指示語のうち、②「かの」③「かしこ」⑧「かの」の三例がこの日の記述に現れる。いずれも「唐土」を指示するが、文脈指示でも現場指示でもなく、観念指示の用法である。日記における場からでは知覚できない対象だからである。それに対応するように用いられている⑨「こゝ」と⑩「この」は書き手がいる場である日本を示す現場指示の用法である。また、会話文中の⑦「かう」も現場指示である。

残り四例が文脈指示であり、④「その」以外はコ系の指示語で、このうち、⑥「かゝる」が直後の和歌を指す後方指示に相当し、他は前方指示である。

唯一ソ系の④「その」は直前の文の「廿日の夜」を指す順当な文脈指示であるのに対して、①「かう」と⑤「これ」の二例は、それぞれ直前の一文の内容を対象とするが、ソ系の指示語に置き換えが可能であり、とくに⑤「これ」は「それ」のほうが、視点の位置としては適切であろう。これらも、あえて中立的ではなく話題として特立させようとした結果と考えられる。

〔例5〕二月二日（頻度一・八）

十一日。雨いさ、かに降りて、止みぬ。

かくて、さし上るに、東の方に、山の横ほれるを見て、人に問へば、「八幡の宮」と言ふ。①「これ」を聞きて喜びて、人々、拝み奉る。

山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。②「こゝ」に、相応寺のほとりに、しばし船を留めて、とかく定むることあり。③「この寺の岸ほとりに、柳多くあり。ある人、④「この柳の影の、川の底に映れるを見て詠める歌、

さ、れ波寄する文をば青柳の影の糸して織るかぞ見る

四例すべてコ系の指示語であり、②「ここ」を保留すると、どれも前方指示の文脈指示とみなされる。ただし、どれもソ系の指示語にも置き換えられる。コ系にしたのは、書き手の立ち位置を前提として、話題化しようとしたからであろう。

②「ここ」は、諸注釈書において、「ここに」の形で、漢文訓読的な接続詞の用法とされ、「そこで」と順接的に解釈されている。「ここ」を場所を示す指示代名詞とすると、直後の「相応寺のほとりに」との重複感がなくもないが、直前にある「山崎の橋」が見える所まで至つてという意ならば、指示性を認めることができよう。「そこで」という順接型の接続関係として考えると、「嬉しきこと限りなし」だから「しばし船を留めて、とかく定むることあり」となつて、文脈的に不自然ではあるまいか。

以上、指示語の使用頻度の高い五日分の日記記述におけるコ系の用法を確認した結果、文脈指示用法としては、必要以上に話題化する傾向が認められた。

その要因として想定されるのは、日記としての現場性あるいは臨場性である。文脈指示の用法は、現場指示から派生し、コ系とソ系の違いはその用法を元にして、指示対象の話題化に関して特立的か中立的かにあるということを先に述べたが、日記の場合は書き手自身が実際に体験した出来事を記述するものであるから、その再現にあたって、それらの出来事の現場性なり臨場性なりを表わそうとするとき、話し手（書き手）側の領域を示すコ系の指示語が選択されたとしても不思議ではない。それは文章でありながら、時折混入される現場指示用法のコ系指示語の使用とも連動する。

そもそも文章において、文脈指示か現場指示か、その用法を分ける基準となるのは、指示対象と想定される内容が文脈内に担保されるか否かであつて、ある指示語が文脈指示の用法とみなせるからといって、その現場指示の用法を排除するものではない。土佐日記が件んの船旅が終つた後にまとめられたとしても、船旅を回想し、あるいはメモを確認する中で、その時どきの様子がその場にいるかのようにありありと思ひ浮かべられれば、結果的に文脈的な自然さを無視してでも、まさに直示的なコ系の指示語を用いることは十分に考えられる。

つまり、土佐日記におけるコ系の指示語の多さは、日記という位相にある作品だからであり、自らの体験の現場性・臨場性を強く打ち出そうとした、あるいは意図せず現れてしまったことによると考えられる。しかも、当時の日記の標準は変体漢文体であつたが、山田孝雄（一九三五）以降、指摘される漢文訓読的な「これ」の用法の影響はまったく認められないのであり、談話をふまえた口語による和文体をとつたからこそ実現した結果とみなされる。見方を変えれば、指示語の文脈指示用法が中心となるべき、独立した文脈を有する文章としては、土佐日記はまだ成熟していない段階にあつたとも言える。

〔問題2の1〕

〔前提2〕で触れたごとく、土佐日記の文章には、漢文訓読的あるいは変体漢文的な用語・用法の認められることが指摘されている。それは、土佐日記のさまざまな表現に認められる事実であるが、こと指示語に関しては、はたしてそれらの影響と言えるか、疑問がなくもない。それらのいくつかを指摘してみたい。

〔問題2の2〕

〔例6〕 一二月二日

男もすなる日記といふものを、女もしてみむ、とて、するなり。その年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の刻に、門出

土佐日記の指示表現をめぐる諸問題

す。

有名な冒頭部分であるが、ここに見られる「それ」という指示語に関して、参看した注釈書は以下のように説明する。各引用末尾に
出典の略称を挙げる。「／」は前後の説明が別箇所にあることを示す。

※漢文の「某年」を訓読するときに使う語。(日本古典文学全集)

※某年／具体的な年次を臘化。(新日本古典文学全集)

※「某年」の訓読語。女性仮託に合わせた文学的設定。事実は承平四年。(日本古典文学集成)

※観智院本「類聚名義抄」に「某ソレ」と訓読するように、「それのとし」とは某年ということになるが、承平四年を某年と表現して、正確な暦年を示さなかったことには、深遠複雑な意味があるのである。／元号年数を伏せて「それのとし」と記し、主人公たる貫之自身を「あるひと」と不定三人称で呼んでいる。こうした事実の臘化には、読者に自由な想像をゆるす物語的な効果と、歴史的事実に束縛されない脚色虚構の自由と、更に貫之が試みようとしている社会風刺に対するの反作用を予防する目的と、三つが考えられるのである。／「それのとし」「いささかに」などは、序文としての莊重味を加える意図があったかも知れないが、「かれこれ」「くらへつる」「日しきりに」というような堅苦しい言葉遣いは、それとは無関係に、男性の日記文体、すなわち変体和臭の漢文調を出そうとする、苦肉の表現技巧であると考えられる。(萩谷全注釈)

※ある年。貫之が帰任のため土佐の国を出発したのは朱雀天皇の承平四年(九三四)であるが、それをわざとおぼめかしていったもの。(日本古典文学大系)

※ある年。承平四年(九三四)のこと。臘化表現。(新日本古典文学大系)

このように、多くの注釈書が、件んの「それ」を、「某年」という漢語の訓読語の一部とみなすとともに、具体年を臘化するためと捉えている。

古事記にも「赤猪子答曰、其年其月(その年その月)、被天皇命、仰待大命、至于今日、経八十歳」(下・雄略天皇)と訓読される一例が見られるが、新日本古典文学全集には「赤猪子は明確な年月を言ったが、それが簡略化したもの」のように、臘化とは異なる

説明がある。

資料として注目したいのは、祝詞である。テキストの日本古典文学大系本には次のような例が見られる。

〔例7〕

…王等・臣等・百官人等、倭国乃の六御県能の刀祢、男女亦に至_マ、今年某（そのの）月某（そのの）日、諸参出来_マ、…（広瀬大忌祭）

〔例8〕

…某（そのの）官某（そのの）位某（そのの）王、中臣某（そのの）官某（そのの）位某（そのの）姓名乎為使_マ…（伊勢大神宮・九月神嘗祭）

〔例7〕の「それ」に関して、日本古典文学大系は「実際の使用には、四月四日、または七月四日と記すのを、某月某日であらわしている」と注している。

その他、「某（そのの）官位姓名乎」（伊勢大神宮・二月祈年、六月・十二月月次祭り）、「某（そのの）官位姓名乎」（伊勢大神宮・豊受宮）、「某（そのの）官某（そのの）位某（そのの）王、中臣某（そのの）官某（そのの）位某姓名（なにがし）乎」（伊勢大神宮・豊受宮同祭）、「弁官某（そのの）位某姓名（なにがし）乎」（伊勢大神宮・遷奉大神宮祝詞）などという例があり、「それ」全一五例が同じ用法である。

このことから、「それの」という表現は、伊勢神宮の例に代表されるように、祝詞における一種の定型的な表現として成り立っていたことが分かる。しかも、「某姓名」に「なにがし」が相当し、かつ現代語の「だれそれ」に対応する「なにがしそれがし」という古代語もあることを考えれば、これらの「それ」は不定称的に用いられたのではないかと推定される。

問題は、祝詞における「それ」の、このような用法が、注釈書などで指摘されているごとく、漢文訓読語としての用法から来たものかという点である。

祝詞が、「古代人の信仰を、口頭言語によって表明したものであるが、それは神のことばでもあったから、一種の法令であり、教訓であり、道徳であった。よいことばを使えばよい結果を得るといふ言霊思想に基づくから、表現も洗練されていた」(日本語学研究事典)とすれば、その詞章は当時の口頭言語、しかも位相的に改まり度の強い、公的な語から構成されていた、あるいは祝詞に使用されることにより、そのような語性を持つと意識されるようになったと考えられる。とすれば、祝詞などの用法の「それ」が漢文訓読の際にも採用されるようになったのであって、その逆ではないとみなすのが順当ではないだろうか。

とすれば、土佐日記冒頭の「その年」という表現が、「序文としての莊重味を加える意図があったかも知れない」(萩谷全注釈)としても、その莊重味は、漢文訓読ではなく、祝詞のような儀礼的な詞章に由来すると考えられる。

もう一つ、問題がある。なぜ祝詞の「それ」が不定称的な用法になったのか、である。「表3」に示したように、祝詞には同じソ系の「その」が二例、用いられているが、二例とも通常の前方文脈指示の用法である。

じつは、「それ」が不定称のように見えるのは、独立した文章を前提として考えるからである。文章は原則として、現場性を持たず、もっぱら言語的文脈に依存するものであるから、当該指示語の指示対象が言語的文脈中に同定できなければ、不定とせざるをえないのである。

しかし、祝詞は口誦されるものであって、文字資料はそれが記載されて、その時その時の場面における祝詞の口誦の、いわば台本となるものである。その各場面における実施にあたっては、時間も当事者も可変的であるから、それに応じて変更が必要となる。そういうことを想定しての「それ」であって、決してそのまま読み上げるわけではなく、不定である物事を指示しているのでもない。祝詞の文字資料の書き手が、それを必要とする読み手のそれぞれに応じて、「それ」の部分に該当する具体的な言葉を代入できるようにしたのである。

このような用法を何と呼ぶべきか。そのままの現場指示でもなければ文脈指示とも言えないとすれば、残るのは観念指示だけであり、「前提2」の表1に△表示したのは、その謂いである。しかし、通常のカ系による観念指示は「話し手(書き手)と聞き手(読み手)双方の観念内に共通にあると想定される対象」を指示する用法を言うが、祝詞の「それ」は読み手にその特定を委ねた、つまり受け手の領域に属することがらを指示するのであって、書き手は関知しないという点で異なる。これはいわば擬似的に仮構された現場指示の

用法とするのが適切ではないかと考える。

その点で思い合わされるのが、土佐日記の該当部分の右傍の「延長八年任土左承平四年歟」という勘物である。これは貫之自筆祖本をきわめて忠実に書写したとされる為家本および青谿書屋本に見られるものであつて、表記・表現ではなく内容に関わる唯一の補筆であり、おそらくは貫之自身によるものではなく、為家あるいはさらにそれ以前の書写者の手になるものとみなされている。このわざわざの勘物が物語るのは、「その年」が具体的な年次を代入することを求める用法であつたからであらう。

もし時期を不特定化し臚化することを常とした当時の物語の手法に倣つたものとするならば、このような勘物は不要どころか不都合でさえある。そもそも事実を記すべき日記において不特定な時間設定ということ自体が不自然なのであり、たとえ不特定化の必要があつたとしても、「ある年」なり「いづれかの年」なりの、他の表現もありえたのである。それらをあえて用いずに「その年」にしたのは、祝詞の定型的な表現と同じく、想定される具体特定の年次があることを前提としたとしか考えられない。もとより、特定しえない一般の読み手にとっては、結果的に臚化された表現にならざるをえないけれども、貫之が当初からそれを意図したわけではあるまい。

つまり、土佐日記冒頭の「その年」の「それ」は、漢文訓読語でもなければ、臚化表現でもない、ということである。

〔問題2の3〕

土佐日記の「この」という指示語五七例のうち九例が、「あひだ(間)」という語を下接する。用例数としては、「この歌」の一〇例に次ぐ多さであり、他は一例のみがほとんどであるので、その用法が目立つ。

峰岸明(一九八六)は、「このあひだに」「かかるあひだに」が圧倒的多数を占める。これは、古記録の常套語とも言ふべき、(略)漢字表記「此間」に相当するものと思われ、「土佐日記」の文章が記録体の特色を有することの一証になるのではないかと考える」(八六三頁)とする。これは、「このあひだに」「かかるあひだに」という表現自体のみならず、指示語ではなく接続詞としての用法になつていることをも意味する。

この指摘をふまえてのことか、土佐日記の諸注釈書では「変体漢文の用語」と説明されるが、「このあひだ」の九例すべてに及んで
いるわけではなく、揺れが見られる。その揺れは、次のABCの三つのグループに整理できる。

〈Aグループ〉

参看した注釈書（日本古典文学大系・新日本古典文学大系・日本古典文学全集・新日本古典文学全集・日本古典文学集成・萩谷全注
釈）すべてが、変体漢文の用語として、接続詞の解釈をするもので、次の四例が相当する。

〔例9〕 二月二十七日

かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にてにはかに失せにしかば、この頃の出で立ちいそぎを見れど、何言も言はず、
京へ帰るに、女子の亡きのみぞ悲しび恋ふる。在る人／＼もえ堪へず。この間に、ある人の書きて出だせる歌、

〔例10〕 一月二十六日

これを聞きて、ある女の童の詠める、
わたつみの道触りの神に手向けする幣の追風止まず吹かなむ
とぞ詠める。

この間に、風のよければ、楫取いたく誇りて、船に帆上げなど喜ぶ。

〔例11〕 二月一日

二月一日。朝の間、雨降る。午刻ばかりに止みぬれば、和泉の灘というふ所より出でて漕ぎ行く。海の上、昨日のごとくに、風
波見えず。黒崎の松原を経て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪のごとくに、貝の色は蘇芳に、五色にいま一色ぞ足
らぬ。

この間に、今日は箱の浦といふ所より網手曳きて行く。

〔例12〕 二月九日

九日。心許なさに、明けぬから、船を曳きつゝ、上れども、川の水なければ、ゐざりにのみぞゐざる。
この間に、わだの泊のあかれの所といふ所あり。

〈Bグループ〉

次の三例は、一方で変体漢文の用語として「ところで」という転換型の接続詞とみなされたり、また一方で「その時に」「この時には」などのように、文脈指示の用法として解釈されたりする例である。

〔例13〕 一二月二八日

廿八日。浦戸より漕ぎ出でて、大湊を追ふ。

この間に、以前の守の子、山口のちみね、酒、よき物ども持て来て、船に入れたり。行くくゝ飲み食ふ。

〔例14〕 一月一七日

十七日。曇れる雲なくなりて、暁月夜いともおもしろければ、船を出だして漕ぎ行く。

この間に、雲の上も海の底も、同じごとくになむありける。

〔例15〕 一月二日

おほろけの願によりてにやあらむ、風も吹かず、好き日出で来て、漕ぎ行く。

この間に、使はれむ、とて付きて来る童あり。

〈Cグループ〉

次の二例は、ともに変体漢文の用語とされながらも、「この時に」や「そのうち」という文脈指示の用法で解釈されるものである。

〔例16〕 一月七日

この長櫃の物は、みな人、童までにくれたれば、飽き満ちて、船子どもは腹鼓を打ちて、海をさへおどろかして、波立てつべし。かくて、この間に事多かり。

〔例17〕 一月一七日

かく言ふ間に、夜やうやく明けゆくに、楫取ら、「黒き雲、にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし。御船返してむ」と言ひて、船返る。この間に、雨降りぬ。いとわびし。

以上のABCの三グループは、Aが、もっとも変体漢文の用語らしい、転換型の接続詞の用法、Cが、もっともそれらしからぬ、文脈指示の用法、そしてBがその中間ということになる。

萩谷全注釈は、一貫して「このあひだ」を変体漢文の用語としながらも、〔例15〕に関連して、土佐日記には「漠然と、近頃の過去の時点を指定する現代口語の「こないだ」と同じ用例や、上文から話題を転ずる時に用いる、「ときに」「ところで」といった接続の言葉としての用例」の両方があり、後者の例が多いことを指摘している。さらに、「両者の区別についても、〔例13〕では、「そこで」「と」ここで」といった接続詞としてではなく、漠然と時期を指定する副詞的修飾語としてはたらいっているものとみる。なぜなら廿八日の条は始まったばかりで、接続詞を置いて一息いれる必要がないからである」と説明したり、〔例17〕についても、「上に「かくて」という接続詞がすでにあるのであるから、更に重ねて「このあひだ」を接続詞として用いたとは思われない。「このときには」といった漠然たる時期指定の副詞的修飾語であろう」と解釈したりしている。

そもそも、「このあひだ」という表現が変体漢文の用語とみなされるのは、それが「間（あひだ）」の単独例も含め、和文にはほとんど見られないのに対して、古記録類には認められるからであるが、峰岸明（一九八六）によれば、変体漢文に類出し、変体漢文体の指標の一つとされるのは、「このあひだ」ではなく、「しかるあひだ」というソ系の表現のほうなのである。しかし、土佐日記には、〔表2〕で示したように、「しかるあひだ」は一例も見出されない。

また、「このあひだ」が指示表現なのか接続表現なのかを判別するためにまず行うべきことは、萩谷全注釈のように、接続詞として

の用法の妥当性の検討ではなく、「この」本来の指示語としての機能を果たしうる対象の認定であらう。そして、〔例9〕～〔例17〕の引用においてそれぞれの直前の表現部分は、「この」の文脈指示の対象として認められうるものである。たしかに、その前後で話題が転換しているとも言えるが、前後の内容相互における時間的な共存性あるいは連続性は認められるのであって、各例の該当部分を、「こんなことをしている間に」という意味で、緩く指示しているとみなすことができる。少なくとも、「このあひだ」の「この」の指示性がまったたく失われている、つまり指示対象が特定されないとまでは言えない。つまり、あえて接続表現とみなすには及ばないということである。むしろ接続表現とみなし、「ところで」のような転換型の接続関係と捉えると、文脈的に大きな齟齬が生じる。

とすれば、土佐日記における「このあひだ」という表現は、その特定性の程度には多少の幅はあるものの、指示表現として捉えておくのが順当であると考ええる。そして、「このあひだ」が変体漢文の用語として特化されるのは、その接続詞的な用法にあるとすれば、土佐日記の「このあひだ」は、それとするに当たらないと言えよう。

「このあひだ」の類似の表現として、同じコ系の「かかるあひだ」と「かくくあひだ」の例を、次に挙げておく。

〔例18〕 一月八日

七日になりぬ。同じ港にあり。

今日は白馬を思へど、かひなし。たゞ波の白きのみぞ見ゆる。

かゝる間に、人の家の、池と名ある所より、鯉はなくて、鮒よりはじめて、川のも海のも、他物ども、長櫃に担ひ続けておこせたり。

〔例19〕 一月二日

十一日。暁に船を出だして、室津を追ふ。

人みなまだ寝たれば、海の有様も見へず。たゞ月を見てぞ、西東をば知りける。かゝる間に、みな夜明けて、手洗ひ、例の事どもして、昼になりぬ。

〔例20〕二月六日

七日。今日、河尻に船入り立ちて、漕ぎ上るに、川の水乾て、悩み思ふ。船の上ること、いと難し。かゝる間に、船君の病者、もとよりこち／＼しき人にて、(略)

〔例21〕一月一七日

これを聞きて、ある人のまた詠める、

影見れば波の底なるひさかたの空漕ぎ渡るわれぞわびしき

かく言ふ間に、夜やうやく明けゆくに、(略)

これらの表現に対しては、どの注釈書も、「こうしているうちに」「そうこうするうちに」「そのうちに」「こうしている間に」「そんな時に」「こう言っている間に」のように解釈しているので、いずれも接続表現としてではなく、直前部を対象とする文脈指示表現として認定していることが明らかである。これらと件んの「このあひだ」との間に、いかほどの径庭があるとも思われぬ。察するに、諸注釈書における解釈の揺れは、「このあひだ」が変体漢文の用語であることを前提し、それならば接続詞的用法であるという意識が先行した結果ではないだろうか。

土佐日記に「このあひだ」という表現が多く、当時の和文体の文章としては異例であるのは事実である。しかし、変体漢文において、より典型的な、ソ系の「しかるあひだ」ではなく、コ系の「このあひだ」あるいは「かかるあひだ」を用いたのは、先にコ系全体の多さの理由として述べたように、日記としての現場性・臨場性のゆえであって、漢文あるいは変体漢文の日記の影響が優先的な理由であるとは考えにくい。

ちなみに、古事記には「このあひだ」に相当する「此間」という漢字語が六例見られるが、新日本古典文学全集本では、すべて「こ」と訓まれ、「此間」の用字は、中国の俗語的用法に基づき、「場所を示す」と説明されている。

〔問題2の4〕

場所を指示する「ここ」というコ系の指示語は、土佐日記に六例あり、〔表4〕に示したように、三例が現場指示、残り三例が保留としたものである。保留の三例はいずれも格助詞「に」を下接して、それが漢文訓読語とみなされている。

この語は、吉田金彦他編〔二〇〇一〕の「訓点語彙」にも立項され、「漢文で、文頭、また時に文中にあつて、先行の叙述を起す」云「言」「此」「斯」「爰」「粵」「茲」字などをココニと訓読することによって、この訓読語法は形成される」と説明される。そして、指示語そのままの用法としての「このところに」と「この時に」という二つの意味とともに、接続詞の用法として、「1 先行の叙述を受けて、その結果生ずる事態を更に叙述する際に用いる語。そこで。それ故に」と、「2 先行の叙述をそこで打ち切り、話題を転換して、新しく叙述を起す際に用いる語。さて。ところで」の二つが挙げられている。

「ここ」の指示語としての用法自体は、〔表3〕に示したように、和文にも少なからず認められるのであって、「に」を下接したとしても、漢文訓読語特有とは言いがたい。違いがあるとすれば、訓読語彙としての「ここに」の指示用法は文脈指示に限られるということであるが、これは元が漢文という文章なのであるから、当然と言えば当然である。加えて、「このあひだ」と同様、接続詞としての用法が、和文系には見られない、漢文訓読語特有ということになろう。

参考までに、古事記における「ここに」と訓じられる一三八例（本文としては「於是」が一三六例、「是」が二例）の解釈を、新日本古典文学全集本の訳によって分類してみると、接続詞としての解釈が一〇三例、指示語としての解釈が三五例となり、前者が全体の四分の三を占める。さらに、その内訳を見ると、順接型が六二例（「そこで」「三七例」「すると」「二二例」「それで」「二例」「そうすれば」一例）、転換型が二〇例（「さて」一八例、「ところで」二例）ある以外にも、吉田金彦他編〔二〇〇一〕では挙げられていない、添加型一九例（「そして」一〇例、「そうして」七例、「こうして」一例、「かくして」一例）や逆接型二例（「ところが」二例）も見られる。

接続詞用法と認定されるのが大半を占める古事記の語彙が漢文訓読的であることは、その本文表記に拠るかぎり当然であろうが、このように文脈によってさまざまな接続類型を表わすとすれば、「ここに」自体は、特定の接続関係を示す働きを持っていないと言わざ

るをえない。それが便利であるために多用されたとも考えられるものの、文脈解釈の如何に強く左右されることは避けられない。

さて、土佐日記の保留例三例は、次に示すとおりであるが、諸注釈書はそろって漢文訓読語と認定した上で、「その時に」という指示用法か、「そこで」という順接型の接続用法かで解釈している。

〔例22〕 二月四日

また、住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人の詠める歌、

今見てぞ身をば知りぬる住の江の松より先に我は経にけり

こゝに、昔へ人の母、一日片時も忘れねば詠める、

住の江に船さし寄せよ忘れ草しるしありやと摘みて行くべく

となむ。

「そこで」のように、順接型に解する立場（日本古典文学集成）と、「その時に」のように指示語として解する立場（日本古典文学全集・萩谷全注釈）とがある。前者については、「ある人」が歌を詠んだから「昔へ人の母」も詠んだということになるが、不自然ではないだろうか。「昔へ人の母」が歌を詠んだのは「一日片時も忘れ」なかつたからである。また、「ここ」という空間を指す語なのに、それを「その時に」と時間を指すように捉える必然性があるだろうか。

この「ここ」は、その前に出てくる「住吉」を指す文脈指示用法であり、そのまま「ここで」と解釈して、何ら不都合はない。コ系を用いたのは、まさにその現場性を示そうとしたからである。

〔例23〕 二月九日

かくて、船曳き上るに、渚の院といふ所を見つゝ行く。その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。後方なる岡には、松の木どもあり。中の庭には、梅の花咲けり。こゝに、人々の言はく、「これ、昔、名高く聞こへたる所なり。故惟喬の

親王の御供に、故在原の業平の中將の、

世の中に絶へて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし

といふ歌詠める所なりけり。今、今日ある人、所に似たる歌詠めり。

千代経たる松にはあれど古への声の寒さは変はらざりけり

諸注釈書一致して「そこで」と、順接型の用法とみなしている例である。さらに、萩谷全注釈では「昔話、ことに紀氏の歴史に重要な意味を持つ惟喬親王の故事をこれから紹介しようというので大いに改まった厳肅な気持が、この訓読調の文体に表現されている」とする。順接型で接続するために、あえて訓読調の「ここに」という表現を選んだということであろう。

しかし、そもそもこの「ここに」を場所を指示する表現として捉えることに何か支障があるのだろうか。文脈の前方には「渚の院といふ所」という表現があり、その箇所を中心とした文脈指示とすることに問題があるとは思えない。先にも述べたように、接続表現という認定は、当該指示語による文脈的な指示性の喪失を前提としているのであって、「ここに」即、接続詞ということには決してならない。

文脈的に注目されるのは、前の方で「その院」とソ系の指示語を使っているのに対して、「ここに」そして会話文中の「これ」と連続してコ系の指示語を用いていることである。これは文脈的にも現場的にも、その場所を取り立てるためである。さらに、後続表現には「今、今日ある人」のように、「昔」と対比した今現在を強調する表現が見られる。まさに、語り手（書き手）の、今ここを表わす直示的な用法の顕示に他ならない。これらを勘案すれば、この「ここに」は、接続用法として、指示性を認めないよりは、積極的に文脈指示の用法とみなす方が文脈に適うであろう。

〔例24〕Ⅱ〔例5〕二月一日

山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。こゝに、相応寺のほとりに、しばし船を留めて、とかく定むるなり。

この例については、〔例5〕において説明したとおり、文脈指示用法ととるのが適切と考えられる。

以上の三例の「ここに」で気付くことは、二月に入ってから連続して出てくることである。〔表5〕に明らかのように、コ系の指示語が二月に急増するわけではなく、先に問題とした「このあひだ」はほぼ全体に分布しているのであるから、この連続的な使用には何らかの理由があったものと考えられる。

それは、「一日片時も忘れねば」（二月四日）、「おもしろかりける所なり」（二月九日）、「嬉しきこと限りなし」（二月一日）のように、どれも強い感情を伴った場面であるということである。いよいよ目指す京が近づいてきたことに対する興奮と感慨が、その場所の一つ一つに対する、「ここ」というコ系の指示語による現場確認となって表れているとみなされる。これらの「ここに」を接続用法とってしまったのでは、抽象化された文脈関係を示すだけであって、この現場性は表出されようがない。

〔問題3の1〕

土佐日記は、貫之が土佐から帰京した承平五年（九三五）から、彼が亡くなる天慶八年（九四四）までの十年の間にまとめられたのは確かであろう。帰京前あるいは帰京中に、このような形で作品化することを考えていたかどうかは不明であるが、備忘録のようなものは付けていたと推定される。ただし、土佐日記には、旅程の事実と一致しない記述が多く見られることから、いわゆる日記として忠実な記録を残そうとしたわけでもなく、またその必要もなかったのであろう。それでも、貫之の記憶だけに頼って書かれたとするには、五五日間に及ぶ日を追っての出来事を再現するのは難しいと思われる。

問題になるのは、元になった資料における記述そのものと、作品化する際の記述の整理・補入との兼ね合いである。それが指示語の用法に対する捉え方の問題となって現れる場合がある。このような土佐日記の成立過程に関わる例を取り上げる。

〔問題3の2〕

土佐日記は、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむ、とて、するなり」という有名な冒頭文にすぐ続けて、以下の表現がある。

〔例25〕 二月二日

その年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の刻に、門出す。そのよし、いさ、かにものに書きつく。

この文脈のままに従うならば、「その」が指示するのは、その前文つまり二月二日のことであるとするのが、きわめて自然であろう。ところが、諸注釈書のすべてが「そのよし」を、「その旅のようす」のように、日記全体の記述を指示するかのように捉えている。このことを、新日本古典文学全集は、「ここまでが全体の序。この筆致はこの作品が帰京後回想の基つき書かれたものであることを示す」のように、その指示のしかたをもつて、そこまでを土佐日記の序の部分となると言い切っている。

長沼英二（一九九八）は、諸注釈書における「序」の認定範囲を、冒頭の第一文のみ、第一文から第三文、第一文から第六文、の三类に分け、第一文から第三文を序とみなす立場は、「冒頭第三文」そのよしいさ、かにもものにかきつく」を、以下の「日記」内容を概括するものと見て、序文的内容を読み取るのであろう」と見ている。

かりに土佐日記に序相当の部分と認めるとしたら、それは旅中の備忘録の記述としては考えられないので、作品化するにあたって、冒頭第一文とともに書き加えられたとしか考えられない。それに呼応するかのようには、「跋」相当とみなされる、最終日の二月一六日の末尾文「とまれかうまれ、疾く破りてむ」も同様である。本来、漢文に由来する序跋のありようから考えれば、土佐日記の冒頭・結末はそれにふさわしいと言えるかという基本的な問題もあるが、どちらも日ごとの記述とはレベルの異なる表現であることから、他の日々の記述とは区別されるとは言える。

しかし、そもそも文脈指示としての「それ」が直近の前方にある特定の文脈ではなく、当該文章のすべてを指示するということはあ

りえないことなのである。かりにそういう解釈が成り立つとすれば、それはもはや文脈指示とは言えない、文章そのものを物化した現場指示の用法であるが、「そのよし」という表現にはなじまない。この「そのよし」は、その直前の一文を指し、その具体的内容が、後に続く三文の記述内容であり、第二文から第六文が二月二一日分の記述となる。

しかし、この捉え方は、「そのよし」に始まる一文が当日のメモとして記されていたことを意味するものではない。「そのよし、いさ、かに物に書きつく」のは、以後の毎日にもあてはまることであり、それをわざわざ繰り返すことは考えられない。旅の最初の日にだけは、その日の出来事全部ではなく、記述するのは「いさ、かに」であることを、作品化する際に書き加えたものであろう。

文脈指示の性質を無視してまで、「そのよし」を記述全体を指す表現として捉えようとしたのは、初日だけの、その一文の記述レベルの違いを、序として分別することによって解決しようとしたからと考えられる。たしかに、土佐日記の冒頭第一文と第三文は、後に補筆された可能性が高いが、第二文がある限り、第三文はあくまでも旅の初日の記述に収まるものである。

〔問題3の3〕

〔例26〕一月一六日

十四日。暁より雨降れば、同じ所に泊れり。

船君、節忌す。精進物なければ、午刻より後に、楢取の昨日釣りたりし鯛に、銭なければ、米を取り掛けて、落ちられぬ。
かゝること、なほありぬ。楢取、また鯛持て来たり。米、酒、しばくくる。楢取、気色悪からず。

右の「かゝる」がその前文を指示するとする点は諸注釈書において異同がないが、問題は、続く「なほありぬ」との関係から、「他の人たちも同じようにしたというのではなく、その後も同じようなことがあったという意味で、「土佐日記」がその日その日の記録の集ではなく、あとからまとめて構想を立てたものである証拠」（日本古典文学全集）などの如く説明する注釈書が多く見られるということである。

このような捉え方をするのは、後日の二月八日の条にも「ある人、鮮らかなる物持て来たり。米して返り事す。男ども、ひそかに言ふなり。「飯粒して鮎釣る」とや。かうやうのこと、所く／＼にあり」とあるのをふまえてのことである。この「かうやうのことありぬ」についても、「この筆致もこの作品がその日ごとの書き継ぎではなく、後に構想的に書かれたことを示す」（新日本古典文学全集）という説明が見られる。

なぜ、このように、「かかること」や「かうやうなこと」云々の表現が、その日ではなく、後から書き加えられたことになるのだろうか。

一月一六日の条では、「かゝること、なほありぬ」のすぐ後に、「楳取、また鯛持て来たり。米、酒、しば／＼くる」という記述が続いているのであるから、同日内の出来事として完結している、つまりわざわざ後日のことを想定する必要はまったくないことである。二月八日のほうの「かうやうのこと、所く／＼にあり」については、「所く／＼」とあるのだから、それ以前に、一月一六日だけではなく、その旨が記載されなかった他日のことも含めた、過去の回想の記述と見てさしつかえなく、しかも、それはその日のうちの回想として成り立つのであって、旅を終えた後にまで引き延ばすには及ばない。

〔例27〕二月六日

七日。今日、河尻に船入り立ちて、漕ぎ上るに、川の水乾て、悩み患ふ。船の上ること、いと難し。

かゝる間に、船君の病者、もとよりこち／＼しき人にて、**かう**やうのこと、さらに知らざりけり。かゝれども、淡路専女の歌に賞でて、都誇りにもあらむ、からくして、怪しき歌捻り出だせり。

右の「かうやうのこと」を、歌を詠むことと解する点において諸注釈書に違いはない。問題となるのは、これを文脈指示の用法とすると、当日内の前方文脈にはそれに相当する表現が見出されないということである。この点についての説明が諸注釈書にはない。ただ萩谷全注釈のみが「副詞「かうやう」は、直前の上文を承けるのが通例であるが、七日の条の中には、そのような条件が見当たらない。むしろ、六日の条の、淡路専女の詠歌した事実をうけているものと見なければならぬ。従って、一連の出来事を、六日・七日両日に

分けて叙述したものかと考えられる」と説明する。「一連の出来事を、六日・七日両日に分けて叙述」というのは、元は一日の出来事だったことを、後日の編集の際に二日分の叙述にしたことを意味すると考えられる。

たしかに、両日の記述には、都が近づいた喜びから歌を詠んだこと、「淡路専女」と「船君」とが歌の応答をしたことにおいて、共通・対応している。しかし、だからといって、それが一日で行われなければならない理由はなく、二日間にまたがったとしても、不自然ではあるまい。少なくとも「かう」という指示語の対象が同日内の前方文脈にないことを根拠に、そのような編集を想定するほうが、不当であろう。

改めて、なぜ「かうやうのこと」が歌を詠むことを指すと捉えられるのかを考えてみると、「かうやうのこと、さらに知らざりけり」の直後に、「か、れども」という逆接の接続表現があつて、「怪しき歌捻り出せり」と続くという文脈から逆算的に導かれたものである。しかし、七日の冒頭の記述からのつながりを見るかぎり、「かゝる間に」の「かゝる」も、「かうやうのこと」の「かう」も、その前の「今日、河尻に船入り立ちて、漕ぎ上るに、川の水乾て、悩み思ふ。船の上ること、いと難し」を指示するとするのがもつとも無理がないのではあるまいか。「かうやうのこと」という表現は、「やう」が下接することにより、文脈以外の内容も含意するので、船の進行が停滞している具体的な状況も指示される。

そして、「さらに知らざりけり」の理由が「もとよりこちくしき」であるならば、この「こちこちし」は歌を詠むという風流を解しないということではなく、現実の状況がどうなっているかにまで気が回らないととることができ。つまり、今、船がどんな大変な状況なのかわきまえずに、呑気にも歌のことばかり考え、詠んだということである。

この日の「かゝる間」については、〔例20〕として取り上げたが、諸注釈書も指示表現として解釈するものだった。しかし、そうすると、この表現は同一文の文末「さらに知らざりけり」を修飾することになる。その中で、「かうやうのこと」を歌を詠むことと捉えては、前の文脈とのつながりが見出されない。むしろ、「かゝる間」を転換型の接続表現と見て、話題が転換することにしたなら、まだそれなりに辻褄が合うはずである。

前文脈を受けて、「かゝる間に」「さらに知らざりけり」とされる事柄として想定できるのは、その日の船の難航状況の実際である。「か、れど」、船君の詠んだ二首は、素直に帰京を喜びを歌う淡路専女の歌とは異なり、ただ水が浅いために船が行き悩んでいることを

ひとり嘆くばかりである。それが「都近くなりぬる喜びに堪へずして、言へるなるべし」というものであったとしても、船君という立場としての配慮・責任には欠ける行為であった。そのことを、帰京後に振り返ってみた時に、貫之は思い及んだのではないだろうか。まさにそういう意味において、この「かうやうのこと」云々という表現が後に補われたという可能性はありと考えられる。

〔背景〕

以上、はじめに、本論の前提となることを三つ、日本語の指示語体系、古代語の指示語、土佐日記の語例と用例数、について確認し、その上で、問題としてと三つ、コ系の多さ、漢文訓読あるいは変体漢文の用語、作品の成立過程、を取り上げ、従来の、おもには注釈書の解釈を批判的に検討し、自らの見解を示した。それらの一々について、ここでは繰り返さない。最後に、土佐日記の指示表現をめぐる諸問題の背景にあると考えられることを、二点、挙げてみたい。

まず一つは、指示語に関することである。近年は、李長波〔二〇〇二〕や、岡崎友子〔二〇一一〕などをはじめ、日本語指示語の歴史に関する優れた研究が公けにされているが、そういう最新の成果が注釈書レベルではまだ生かされていないことである。出版時期などを考えれば、ある程度はやむをえないかもしれない面もあるが、それ以前の問題として、そもそも指示語に関する基本的な認識が不十分なのではないかとさえ思われる、安易で杜撰な説明が見られる。コ系の指示語を現代語訳するにあたって、ソ系に置き換え、とくに注も加えることなく済ませるようでは、土佐日記におけるコ系の異様な多さに気付くはずもない。ソ系に直さなければならぬ違和感こそが、土佐日記における指示語使用の特徴となりうるのにもかわらず、である。説明が付されているのはまだ良心的と言えるが、それも従来の注釈を踏襲したにすぎないものか、あるいは指示語理解に問題があることを露呈したものか、でしかない。

ついでながら、かつて半沢幹一〔二〇〇一〕において、古代和歌における「かく」の現場指示性のありようについて問題にしたことがあるが、それをふまえて和歌の解釈が見直されることもなく、単純かつ一般的な強調表現とみなしているようである。

古典注釈がもつばら文学研究者の手に成ることの現状について、とやかく言うつもりはないし、国語史研究者の関心が必ずしも本文読解のほうに向いているわけでもない。ただ、指示語一つとってみても、本論で取り上げたような問題があるとするれば、その背景とし

ては、古典への導入でもあり研究成果の集大成でもあるべき注釈書が、その役割を十分に果たしていないのではないかと考えられるのである。

もう一つは、土佐日記の文体に関することである。半沢幹一（一九九八）および半沢幹一（二〇〇九）において、土佐日記の文体のありようを取り上げてきたが、口語対文語、和文対漢文訓読文、男性的対女性的、実用文対創作文などのような、後々設けられた二項対立的な把握のしかたが見直される気配が一向に認められない。

指示語に関しては、漢文訓読文あるいは変体漢文に用いられていさえすれば、その位相・その文体の用語として、ほぼ自動的に認定されている感があり、当時の言語運用の全体的状況や土佐日記の創作過程の個別の事情に関する配慮が認められない。注釈書において、変体漢文的な接続用法としながらも、現代語訳では指示語として解釈するという矛盾が少なからず見られるのも、そのような先入主が背景にあるからと考えられる。これは、文学研究者のみならず、国語史研究者に関しても同様に指摘できそうなどころである。

〔附論1の1〕

本論では、指示性を失ったものとして、接続詞と認定しうる語については、あらかじめ除外したが、接続詞としてもコ系とソ系の対立は見られ、しかも一一例と九例のように、ほぼ拮抗している。現代語の接続詞においては、指示語由来の語は圧倒的にソ系が多いことを考え合わせれば、土佐日記では接続詞としてもコ系が目立つと言える。また、特定の連語形式によって接続詞とはしたものの、指示語本来の指示性が残存しているとみなせる例もなくはない。これらの点について、一瞥しておきたい。

〔附論1の2〕

接続助詞「て」が下接する「かくて」が七例、「さて」が五例、土佐日記には見られる。このうち、「さて」のほうは全例が次のように、その前後で明らかに話題が変わっているので、転換型の接続関係を示していることが明らかである。

〔例28〕 一月二三日

海を見やれば、

雲もみな波とぞ見ゆる海女もがないづれか海と問ひてしるべく
となむ歌詠める。さて、十日あまりなれば、月おもしろし。

〔例29〕 一月一六日

ある人の、この波立つを見て詠める歌、

霜だにも置かぬ方ぞといふなれど波の中には雪ぞ降りける

さて、船に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になりけり。

〔例30〕 一月二十日

唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことにやあらむ。さて、今、當時を思ひやりて、ある人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

〔例31〕 二月五日

楫取の言はく、「この住吉の明神は、例の神ぞかし。欲しき物ぞおはすらむ」とは、今めくものか。さて、「幣を奉り給へ」と言ふ。

〔例32〕 二月一六日

いと辛く見ゆれど、志はせむとす。

さて、池めいて窪まり、水漬ける所あり。ほとりに松もありき。

それに対して、「かくて」の方は、次に示すとおりであるが、接続表現か指示表現か、どちらともみなしうる例が見られる。

[例33] 一月七日

この長櫃の物は、みな人、童までにくれたれば、飽き満ちて、船子どもは腹鼓を打ちて、海をさへおどろかして、波立てつべし。かくて、この間に事多かり。今日、破籠持たせて来たる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。

[例34] 一月九日

これを見送らむ、とてぞ、この人どもは追ひ来ける。かくて、漕ぎ行くまに、海のほとりにとまれる人も遠くなりぬ。

[例35] 一月九日

岸にも言ふことあるべし。船にも思ふことあれど、かひなし。か、れど、この歌をひとり言にしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れども文しなれば知らずやあるらむ

かくて、宇多の松原を行き過ぐ。

[例36] 二月三日

風の吹くこと止まねば、岸の波立ち返る。これにつけて詠める歌、

麻を縫りてかひなきものは落ち積もる涙の珠を貫かぬなりけり

かくて、今日は暮れぬ。

[例37] 二月九日

この間に、わだの泊のあかれの所といふ所あり。米、魚など乞へば、行ひつ。

かくて、船曳き上るに、渚の院といふ所を見つ、行く。

[例38] 二月二日

十一日。雨いさ、かに降りて、止みぬ。

かくて、さし上るに、東の方に、山の横ほれるを見て、人に問へば、「八幡の宮」と言ふ。

〔例39〕二月十六日

十六日。今日の夜さつかた、京へ上る。ついでに見れば、山崎の小櫃も絵も、まがりの大鉤の像も、変はらざりけり。「売り人の心をぞ知らぬ」とぞ言ふなる。

かくて、京へ行くに、島坂にて、人、饗応したり。

どの「かくて」も、「かく」がその前文脈の内容をその一部として含みながらの、ゆるやかな指示をしているととることが可能である。つまり、その文脈における出来事を一例として、その他にもいろいろとしているうちに、という解釈ができるということである。逆に言えば、「かくて」を接続表現と見た場合、「さて」が「ところで」と同じく転換型と認められたのに対して、どのような接続類型を示すかが問題になる。

市川孝〔一九七八〕における接続類型によれば、現代語の「かくて」あるいは「こうして」という表現は順接型に分類される。土佐日記における「かくて」が原因に対する結果を示す関係を示しているかを改めて検討すると、〔例33〕から〔例39〕のどれも相当しがたい。ただ、〔例38〕だけは、「雨いさ、かに降りて、止みぬ」ことが、「さし上る」ことの理由とすれば、順接型の接続表現とみなせなくはない。

以上より、「て」という接続助詞を下接する点で共通する「かくて」と「さて」であるが、同じく接続表現として対立した関係にはなく、「かくて」のほうはなお指示性を保持した用法になっていることが確認できよう。さらに言えば、接続詞として除外した「かくて」が指示性を有する用法であるとすれば、土佐日記の指示表現におけるコ系の割合はさらに高くなり、その特徴がより際立つことにもなる。

〔附論1の3〕

逆接型の接続表現として、コ系由来の「かかれど」が一例、「かかれども」二例の計三例、ソ系由来の「しかれども」と「されど」

各一例の計二例、順接型の接続表現として、コ系由来の「かかれば」一例、ソ系由来の「されば」一例がある。これらは、「かくて」と「さて」の場合とは異なり、同じ接続表現であり、しかも同じ接続類型を示すので、由来とするコ系とソ系の違いが認められることが予想される。まずは、逆接型から確認してみる。

〔例40〕 一月九日

岸にも言ふことあるべし。船にも思ふことあれど、かひなし。かゝれど、この歌をひとり言にしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れども文しなれば知らずやあるらむ

かくて、宇多の松原を行き過ぐ。

〔例41〕 一月一八日

この泊、遠く見れども近く見れども、いとおもしろし。かゝれども苦しければ、何事も思ほへず。

〔例42〕 二月七日

かゝる間に、船君の病者、もとよりこち／＼しき人にて、かうやうのこと、さらに知らざりけり。かゝれども、淡路専女の歌に貸でて、都誇りにもあらむ、からくして、怪しき歌捻り出だせり。

〔例43〕 二月四日

四日。楫取、「今日、風雲の気色はなはだ悪し」と言ひて、船出ださずなりぬ。しかれども、ひねもずに波風立たず。この楫取は、日もえ計らぬ乞丐なりけり。

〔例44〕 二月四日

女子のためには、親幼くなるぬべし。「珠ならずもありけむを」と人言はむや。されど、「死し子、顔よかりき」と言ふやうもあり。

〔例45〕 二月一六日

家に到りて、門に入るに、月明ければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまして、言ふかひなくぞ毀れ破れたる。家に預けた

りつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。さるは、便りごとに物も絶へず得させたり。

〔例40〕から〔例42〕と〔例43〕から〔例45〕とで明らかに異なるのは、当該接続表現に続く文脈の焦点である。コ系由来の前者は三例とも、書き手自身の行為なり感情なりに焦点があるのに対して、ソ系由来の後者は三例とも書き手以外の事柄に焦点がある（〔例45〕は書き手側の行為として表現されているが、話題の焦点は相手側の対応にある）。この相違は、コ系とソ系の指示語としての機能の違いをそのまま引き継いでいると見ることが出来る。

なお、同じソ系における「しか」と「さ」の違いは、位相として前者が漢文訓読的、後者が和文的とされる。前後の文脈における用語を見れば、それぞれに即した使い分けであり、機能的な違いはとくには認められない。

次はともに順接型の接続表現であるが、左に示すように、コ系の〔例46〕とソ系の〔例47〕との違いは、逆接型の場合とまったく同様のことが指摘できる。〔例47〕の「されば」が原因・結果の関係として結び付けている事柄は、前文脈における、鏡を「海にうち嵌め」ることと、後文脈における「うちつけに、海は鏡の面のごとなりぬ」ることであって、書き手側の感情や行為を表わす「口惜し」や「ある人の詠める」などは関与していない。

〔例46〕 二月四日

この泊の浜には、種々の美わしき貝、石など多かり。かゝれば、たゞ昔の人をのみ恋ひつゝ、船なる人の詠める、

〔例47〕 二月五日

また、言ふに徒ひて、いかゞはせむ、とて、「眼もこそ二つあれ、たゞ一つある鏡を奉る」とて、海にうち嵌めつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡の面のごとなりぬれば、ある人の詠める歌、

参照文献

- 李長波 (二〇〇二) 『日本語指示体系の歴史』 京都大学学術出版会
市川孝 (一九七八) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版
岡崎友子 (二〇一一) 『日本語指示詞の歴史的研究』 ひつじ書房
金水敏・田窪行則編 (一九九二) 『日本語研究資料集 指示詞』 ひつじ書房
佐久間册 (一九三六) 『現代日本語の表現と語法』 厚生閣
築島裕 (一九六三) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』 東京大学出版会
長沼英二 (一九九八) 『土左日記』 の「序」の範圍「青葉ことばの会編『日本語研究法(古代語編)』おうふう
半沢幹一 (一九九八) 『日記らしい文章、女らしい文章か?』 青葉ことばの会編『日本語研究法(古代語編)』おうふう
半沢幹一 (二〇〇二) 『古代和歌における指示副詞「かく」』 『国語語彙史の研究』 第二十集、和泉書院
半沢幹一 (二〇〇九) 『文体・位相から見た語彙史』 安部清哉他『シリーズ日本語史? 語彙史』 岩波書店
峰岸明 (一九八六) 『平安時代古記録の国語学的研究』 東京大学出版会
宮島達夫他編 (二〇一四) 『日本語古典対照分類語彙表』 笠間書院
山田孝雄 (一九三五) 『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』 宝文館出版
吉田金彦他編 (二〇〇二) 『調点語辞典』 東京堂出版